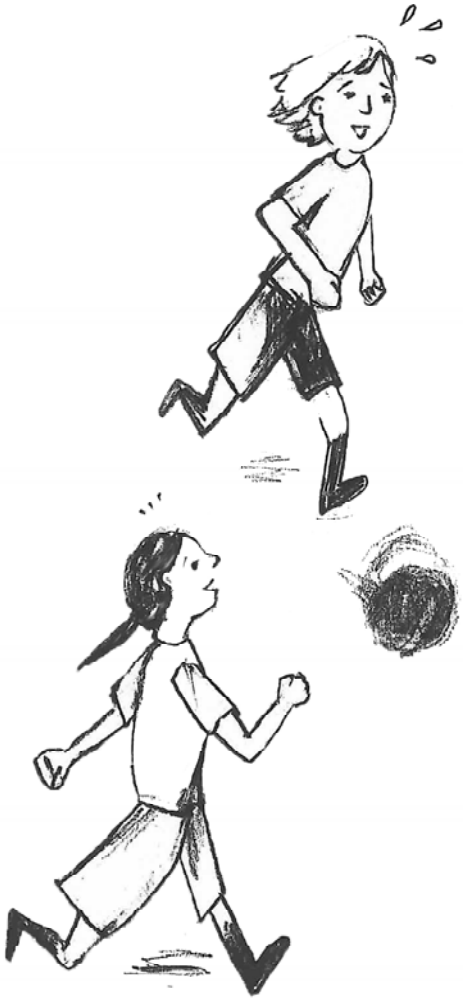
【小学校・高学年】

大きな楠の木の下で

①バンッ。
「ばっちり。今度は、わたしがけるよ。」
明子が、受けたボールをいきおいよくけり返した。
　みずきはボールをスッと受け止めると、ボールに片足をのせたまま、
「ねえ、明子。今度の日曜日、買い物行かない？」
と、笑いながらさそってきた。
「ああ、幸恵の誕生日プレゼントでしょ。でも、大会までは、がんばるよ。優勝しなきゃ。」
明子は力の入った声で答えた。みずきも、その声を聞いて、
「そう、そう。そうだね。今年は去年みたいに決勝で負けたくないからね。いくぞ。えいっ。」
と、いきおいよくボールをけりかえした。
「そうだよ。その調子。」
明子たちが通う学校では、毎年、クラス対こうサッカー大会がある。どのクラスも優勝を目指して練習に熱が入る。明子も、優勝を目指してみずきと、毎日放課後練習をしていた。



②いよいよクラス対こうサッカー大会の日になった。明子とみずきのクラスは順調に決勝戦に勝ち進んだ。明子が、
「ここまで来たね、みずき。今度はいくよ。」
と言うと、みずきが、

「うん、でも、さすがにドキドキするね。」
とこたえる。
　ピー。プレー開始の合図。これに勝てば優勝と思うと、どちらのチームも自然に力が入る。互いに得点のないまま前半戦を終りょうした。後半戦も、互いにゆずらず、もうロスタイムに入ろうかというときだった。みずきが相手ゴール前に入ったしゅん間、みずきめがけてボールが飛んできた。ボールをサッと受けながらもみずきの目には、ゴールネットが入っていた。
「みずき、こっちっ！」
明子に声をかけられたが、みずきはそのまま、相手のすきをねらってシュートを打った。しかし、相手チームのキーパーがボールを受け止めると、サッとボールをけり返した。そこから相手はパスを回し、あっという間に一点を入れられてしまった。
　ピッ、ピー。審判の先生のホイッスルでゲームは終わった。
　全員、センターに整列し、互いに礼をした直後だった。
「ちょっと、みずき、あれはないでしょ。何であそこでパスを回さなかったの。あれじゃ、相手にパスしてるようなもんじゃない。」
明子のきびしい声だった。
「ごめん、ごめん。そんなに怒らないでよ。」
みずきも悔しそうにこたえた。それっきりゲームのことは話さないまま大会は終わった。
　家に帰ったみずきが、ふと明子のブログを見ると、
『〇〇は、本当に変だよ。みんな一生けん命やってるのに、自分もがんばるとか言って、失敗したら、「ごめん、ごめん」だって。結局ゲームは負けちゃったよ。』と書き込んであった。みずきは、いつも明子と話しているときとは何かちがう感じがして、しばらく机の上を見つめていた。

※ブログ
ウェブログのこと。部活のことや趣味のことなど、様々な話題や写真などを日記風にインターネットで公開できる。

③サッカー大会が終わった次の日の朝、ゲームの時、ゴールキーパーをしていた加菜が

「ねえ、みずき。明子のブログを読んだ。あそこまで書くかなあ。みんな一生けん命やってたんだからさあ、気にしない方がいいよ。」
と、話しかけてきた。みずきは、
「あ、ありがとう。大丈夫だよ。気にしてないから。明子も一生けん命だったし。」
と返した。そこへ、明子がやって来るとみずきは急に話すのをやめた。いつもなら、
「おはよう。」
と声をかけあうのに、今日はどちらも言わなかった。何となく気まずい雰囲気の中で一日がすぎた。明子はほとんど誰とも話すことはなかった。その夜、みずきは明子のブログを見ておどろいた。昨日は、誰も書き込みがなかったのに、たくさんの書き込みが続いていた。
『誰も気を抜いてなんかいないし、ここまで書くのはおかしいよ。』
『誰だって失敗することはあるよ。自分は失敗しないとか？』等々
　明子のブログの書き込みや、学校でだまったまま席に座っている明子の様子を見て、
（どうしようかなあ。）
と思う日が数日続いた。

④ある日、みずきが家に帰り、大会が終わってからも悔しくて毎日続けていたサッカーの練習をしているとき、明は通りかかった。みずきがサッカーの練習をしていることに少しおどろいたが、さすがに声をかけにくく明子は通り過ぎた。みずきもどうしようと戸惑ったが、明子がそのまま通り過ぎたので、ほっとして練習を続けた。
　そろそろ日も暮れてきたので家に入ろうとした時、今度は、自転車に乗った加菜が通りかかった。それを見たみずきは、加菜を呼び止め、明子に出会った話をした。
「さっき明子が通りかかったの。何か話したほうがいいかなとも思ったけど、どう話しかけようかと思ってるうちに通り過ぎちゃったから、そのままになっちゃった。」
はじめは笑顔でみずきの話を聞いていた加菜は、急に、まじめな顔になって話し始めた。

「そうかあ。ねえ、みずき、友だちって何だろうね？」
「えっ？」
「だって、明子のブログ。たしかに明子の書き込みも、その後の書き込みもどうかと思うよ。でも、それを知っていて、このままだまってるのが本当の友達かなあ。」
「あぁ…。」
加菜には自分の気持ちを気付かれているような気がした。加菜と分かれた後も、明子のブログを見ていたこの数日をゆっくりとふり返った。それから、肩を上げて大きく息をすると、何度もうなずいた。

⑤「おはよう。」
翌朝、みずきは明子に声をかけた。ふりむいた明子の目は少し赤かった。みずきが、
「明子、本当にごめんなさい。ブログの書き込みに…」
そこまで言うと、今度は、明子がさえぎるように、
「私の方こそごめんなさい。元々自分が悪かったの。昨日、みずきが練習しているのを見て、何であそこまで書いちゃったんだろうって考えると、昨日は眠れなかったよ。でも、みずき…。みずき、ちょっと目、赤くない？」
「えっ。明子もだよ。」
お互い顔を見合わすと、思わず笑顔がこぼれた。明子の笑顔を見ていたみずきは、胸のおくに引っかかっていた何かが取れたようだった。
業間になると、校舎の裏の大きな楠の木の下で、二人は笑いながらボールをけっていた。
その夜、明子のブログを見ると、あの書き込みは消え、すっかり模様替えをしていた。